

学術俯瞰講義 死すべき者としての人間一生と死の思想

第3回 2009年5月7日

# 死に直面しつつ 生きる

清水哲郎 SHIMIZU Tetsuro  
東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文学開発センター

# 今回の授業で考えること

- 私たちは、いずれは重篤な病や高齢により、死に直面するようになる。
  - そうなった時に、最後まで前向きに、尊厳を持って生きることができるだろうか。
  - 周囲の者たちは死に直面した人たちをどのようにケアないし支援することができるだろうか。
- Contents
  - 死に直面するということ
  - 希望の在処
  - 尊厳ある死→尊厳をもって最後まで生きること
  - 終末期における余命とQOL

# 1. <死に直面する> ということ

# 死に直面する ということ

- 皆、日々〈死に直面している〉ともいえる
  - 意識していない／まさかと思っている
- 通常〈死に直面する〉と思われるのは：
  - 重篤な病に罹る→「治らなかったら」という可能性を意識する／自らの人生の物語り(人生計画)、価値観(何が大事か)を揺るがすような分かれ道にさしかかる→死に直面しつつ選ばなければならない。
  - 高齢になる→「棺桶に片足つつこんでいる」、「老い先短い」: 人生の物語りの中で人生の終りが意識される
  - 死が迫っており(日単位、週単位、月単位で)、避けられないという事態になる

# 死に直面する ということ

- 例えば重篤な病に罹る→「骨肉腫が右脚に見つかりました。その状態からすると、右脚を切断する手術をして、転移が全身に広がらないようにする必要があります。」と言われたら？
  - 「私の人生は陸上競技だ。オリンピックを目指して、いのちをかけてきた。走れない人生なんて生きるに価しない。まだ走れるのだから、走れるうちは走って、それで手遅れになっても仕方ない」
  - 「私には他の可能性もあるはずだ。右脚を切断してこれから先のいのちを贖い、新しい道を探そう。この際、今までできなかった読書をいろいろしてみようか。・・・パラリンピック出場ということもあるかも」
  - 治療方針決定のプロセスは、患者側からすれば、このような厳しい思考を経て、価値観が変容し、人生の物語りを書き換えるプロセス
- 人間には、厳しい状況を切り抜け、新しい可能性を見出す力が備わっている(事実からの推論)。
  - そういう力が活性化しやすいようにしておく。
  - 厳しい決断を迫られ、悩み戸惑う仲間を理解し、支援する

# 生きる姿勢＋状況認識→行動

- 個別状況での行為選択 欲求・意思＋状況認識
  - おいしいものが食べたい＋このチェリーパイはおいしいだろうなあ → 食べる
  - 太りたくない＋このチェリーパイを食べると太るぞ → 食べない

\* 欲求・意思と状況認識は対になって成立する
- より広い状況での人生計画の選択
  - 死について理解を深め、備えておきたい＋この学術俯瞰講義を受講すると、その役にたつだろう → 受講する
- もっとも一般的状況での生の選択(スピリチュアルな領域)
  - 現在の自己の生をどういう姿勢で生きようとしているか
  - ＋ 世界を、全体として／根本的にどう理解しているか

# 世界の中にある私の世界認識=世界への態度

人の「スピリチュアル」と言われる面：現在の自己の生をどうという姿勢で生きようとしているか⇔世界を、全体として、あるいは根本的にどう理解しているか

- 私の現在の生を肯定する=世界の中のこの私を肯定的に把握する(意志&認識)(=尊厳を持って生きる)
  - 私は誕生から始まり、死に終る物語りの中にいる
  - 私は人々のネットワークの中で位置をもっている
  - 無に向かって(=私自身と向き合って)、私は私であり続ける

## **2. 死に直面した時の希望の在処**



# 死に直面した時の希望の在処

## ■ 候補

- 治るという望みを最後まで捨てない？
- 死は終わりではなく、死後の生への移行点？

## ■ 現在—死の時点—その後 という時間軸上で考えない

- 「死者の列に加わる」ということは希望ではない

## ■ 現在の私の前に向かう姿勢に《希望》をみる

# 死に直面した時の希望の在処

- 現在の私の前向きの姿勢に《希望》は根差す
  - 現在の生の瞬間を《生きつつある生》と見る／《生き終わった生》と見る
  - 死までの時間が短くなるということによっては、希望は減少しない
  - 《死につつある》というなら、始めから《死につつ》あった
  - 「まだまだ」と「そろそろかな」との狭間で
- 《希望》(=前向きの姿勢)は、共に生きる人々の輪の中で支えられる
- 無に向かう私は、いのちを恵み(与えられた粹／「何もない」に優るもの)として受け取る/死もまた恵み
  - 「もっと生きたい！」でなぜ悪い？悪くはないが、本人が辛いだろう
- ⇔《尊厳》をもって最後まで生きることの一面
  - Dying with dignity = living with dignity

# できることがなくなっていく私を いかに肯定するか

- できるほうが良い／でもできなくても良い
  - 居ることはできる⇔「居る」のは人々の輪の中にいるということ 周囲の人から肯定され、受容られること→居心地がよい
- 《為す》から《眺める》へ
  - 哲学史的にはより高い人間の有り様
  - できるのにしないことと区別する: 援助を必要とする仲間を援助することは、援助する者にとって喜び／喜びであって負担ではないように社会的ケアのシステムを整える必要がある
  - 私にできる社会貢献は、堂々とみなに世話をかけ、社会的資源に与り、そのようにして私たちの社会が「誰一人をも切り捨てず、仲間として支える」社会であることを身をもって示すことである、と理解する
    - ⇔《尊厳》をもって最後まで生きることの一面

# 〈スピリチュアル・ケア〉の核心

- 以上、いろいろあっても、なにより、  
QOLの身体面、心理-社会面のよい状態  
がスピリチュアル面のWell-beingを支える
- 自分の人生を、世界をどう状況認識しているかが、スピリチュアルQOLの核心(意志的認識なので理屈ではない)
  - 状況認識の核に、仲間と共にあること、独りではないことの大切さ
  - 無に向かう単独の私もまた、人々の輪のなかで支えられている
- ⇒ スピリチュアル面のケアの核心
  - 相手の傍らにあること(寄り添うこと)/相手が見ていることを見ようとする(そのために〈聴く〉ことは一つの途であるが、〈聴く〉にこだわり過ぎるとかえってまずい
  - 相手を助けようなどという姿勢はおこがましい／人生の先達を敬意をもって支える態度(cf. 死を賭して修行中の高僧を支える信徒)

### **3. <尊厳死> と <尊厳を持って最 期まで生きる> こと**

# 《尊厳死》と《尊厳ある死》

- 尊厳死 < 尊厳ある死 (death with dignity、dying with dignity)
  - 日本では<徒な延命治療>をしないで、死に至ること？
  - インターネットでヒットするのは、オレゴン州の「尊厳死法」(<医師に幫助された自殺>を一定の条件のもとで認めるもの)
    - 本来はある死に方を指す語ではなかった
- <尊厳ある死>はもともとは終末期の患者の最後の日々をどう支援するか、目標を示す用語(「尊厳と快適さをもって」「尊厳と平和をもって」)
  - 「尊厳」は「死」を形容しているのではなく、死に向かって最後の生を生きている「人」のあり方を記述している

# 《人の尊厳》をどう捉えるか

《尊厳》 dignity 辞書を見ると:

- 1) 威厳ある見かけ・振舞い
    - Dignity is behaviour or an appearance which is serious, calm, and controlled; used showing approval.
  
  - 2) 尊重に値するという性質
    - Dignity is the quality of being worthy of respect.
  
  - 3) 自らに価値があると感じること
    - Someone's dignity is the sense that they have of their own importance.
- Cobuild English Dictionary

# 《人の尊厳》をどう捉えるか

《尊厳》 dignity には3通りの意味がある

- (1) 威厳ある見かけ・振舞い
- (2) 尊重に値するという性質
  - 《尊厳》は、価値の中でも「尊いものとして大事にする(に値する性質)」(cf. 所有物を大事にする)
  - 何かを「尊厳ある」と言うことは、「**弄(もてあそ)んではならない**」と語ることに他ならない。
    - 「受精卵にも生命の尊厳がある」「どのような状態になっても人の尊厳に変わりはない」
- (3) 自らに価値があると感じること(「**〈誰か〉の尊厳**」)
  - 主観的自己評価(≡自尊感情)／自らのこの生を肯定できるというあり方
    - 「こうなったら私の尊厳は失われた」(現実に尊厳があるかないかの話ではない)。



# 《尊厳ある死》をどう捉えるか

- 「尊厳ある死」death with dignity は、本来は「尊厳をもって死に至るまで生きること」dying with dignityである
  - 死に至るまで、自らの存在を肯定する自尊心をもって、生きるあり方を指しており、それが終末期ケアの目的であった。(＝スピリチュアル・ケアの目標)
  - 「尊厳が失われた(自らのあり方を肯定できない)状態で生きたくない」と言われたら？ ⇔
    - 「死を選択できる(ようにしよう)」: 生に対してネガティブな方向で動く
      - だがこれは、「QOLが低くて生きるに値しないのなら死を」という安楽死の論理と同じ。
    - 「尊厳を保てる／回復できるようにどう支えるか？」
      - ケア的姿勢はこのような発想をする

## **4. 終末期における余命とQOL**

# 延命と縮命の間で

- QOLと余命の長さ:両方とも改善できれば、それに越したことはない(現在では大半がこれ)
- どちらかを優先的に選択しなければならない場合:
  - 苦しくてもより長く = 延命優先(苦痛許容)  
——「徒な延命医療」への批判
  - 短くても過ごし易く = 緩和優先(縮命許容)  
—— 死期が早まるような治療をどう考えるか
  - 両者は、決して *延命か死か* の違いではない
- 死生をめぐる価値観の違い—公共的価値観の変化

# 緩和的治療が 余命を短縮するおそれがある時

- 「緩和ケアは死を早めることも、引き延ばすこともしない-----Palliative care ....neither hastens nor postpones death.」 (WHO 1990:2.1
  - cf.-2002:...neither intends to hasten nor ...)
  - 意図的には延命も縮命もしない → したがって、「安楽死」と「徒な延命」は否定する。しかし.....
- 耐えられない苦痛であり、他に有効な手段がなく、患者が希望しているならば、縮命のおそれがあっても、苦痛の緩和のための治療を実行すべきである。
  - ただし、こういう状況は現在ではごく少なくなっているらしい